

「コロナ禍を乗り越える航空機製造業：産業の動向」 を講演

～航空機の設計開発、運航整備、機体など製造を将来目指す学生に向けて～

当工業会は、10月24日に日本航空大学校 石川にて、航空機の設計開発、整備、機体など航空宇宙の機器製造に従事すべく勉学に励む2年生を中心にした百名余りに、近い将来の民間航空機の運航・製造の業界動向予測について、講演した。併せて、大学のみならず付属の高校で就職指導に携わる先生方も加わり、最近の就職先の指向や少子化に伴う航空機製造、航空整備の人材不足について情報交換を行った。

1. 講演内容概要



「コロナ禍を乗り越える航空機製造業：産業の動向」と題して、航空機産業の特徴（自動車産業との比較、技術の波及効果）、産業規模の近況（コロナ禍の影響で25%減少、防衛用の2倍以上を売上げる民間機の急激な進展、欧米との産業比較・共同開発の紹介）、今後も20年間にわたり年4%の成長が予測される旅客需要予測と新造旅客機数の予測、サイズ別、地域別、用途別の需要予測を説明した。

航空輸送は20年後に現在の2.4倍に増え、約3.5万機が新しく20年間で就航する、熾烈な国際競争が予想され世界中で確実な成長が見込まれる成長分野と予測されている。コロ

ナ禍の影響は過去に一時的であって、史上でほぼ最も多い月産旅客機数が現時点でも新たに製造され続け、数多く航空機が運航されていることをお話した。

また、講演後には聴講学生や航空関連の企業への内定学生と質疑応答を行い、航空機の運航業界・製造業界への就業に理解を深め、航空機関連業界を理解頂くよう仕事の実情、課題について学生と交流の機会を設けた。

2. 航空機業界への就業をめぐる情報交換

当工業会には、会員企業を通し、とりわけ東海地区において中堅より規模の小さい企業において、工場で航空機製造にかかわる従事する者は、近年募集しても採用に繋がらないという深刻な人手不足に見舞われているとの声が会社経営者から聞こえている。このため、若年層の途中転職希望者あるいは新卒採用の動向について、就職担当の大学の先生や付属高校の就職担当教諭とその実情について伺い、今後の課題解消に向けて当会の山岡常務理事も交えて率直に意見を交換した。

近年の少子化による学生募集の厳しさはあるものの、卒業生はコロナ禍にあっても就職状況が良いこと、就職後に年をあまり経ない



転職が増加傾向にあること、保護者を含め厳しい労働条件の企業への就業を忌避する傾向が強い、その一方で中小企業でも働きがいを感じる学生は生き生きと就職していることなど、ここ数年の学生・生徒たちの就職事情を聞き取った。

3. 所感

昭和7年、航空機がまだ木と布と鉄パイプで製造されていた時期に設立された日本航空学園は、長い歴史と伝統の下で、日本に航空輸送・製造を支える人材を供し続けている。現在も航空輸送に携わる航空搭乗員、整備士、航空機製造者、関連の政府機関職員を輩出し、航空への強い就業意志を持つ学生を全国から集めている。東海地区の工業高校で聞き取った定員割れや大学進学増加に伴う「ものづくり」就業者数の減少環境とは様相が異なり、航空業界に携わりたい人材の集結

地であった。学生・生徒さん達の航空への思いは熱く、学生・生徒さん達の志望動機やその形成過程に、人材不足解決の手がかりの一端があると感じた。

コロナ禍で一時期大きく落ち込んだものの、民間航空機の運航・整備や製造は世界各地で順調に拡大している。一方日本では少子化により就業者数とりわけものづくりの現場を指向する若者は減少し、各所で人手不足が顕在化している。自動化や省人化の進展を加味しても、人材確保の課題・方策について、中長期的な取り組みの重要性は高まるであろう。少子化で他産業と若年人材の奪い合いが生じている現在、ITや半導体産業、あるいはオシャレなサービス業を志向する若年層に、製造業としてどのように魅力を提示し、航空機関連産業の基盤固めの人材を確保するのか、課題の根深さをあらためて知る機会となった。

〔(一社) 日本航空宇宙工業会 調査部 部長 櫻井 浩己〕